

## 共感性、評価懸念及び第三者の存在が‘共感的’羞恥に及ぼす影響の検討

人間福祉学科 福祉心理系 T. J.

共感的羞恥とは、他者の恥ずかしい行為を見て観察者(A)自身が恥ずかしくなることで、行為者(B)への共感を媒介とする羞恥感情である(Miller, 1987)。しかし、共感的羞恥に共感性が媒介しているか十分に検討されておらず、共感的羞恥の生起する状況も解明されていない。また、第三者(C)が存在する時の影響も不明である。

本研究では、AがBと同類に見られる評価懸念が共感的羞恥に影響している可能性を考慮し、Aの共感性や評価懸念、Cの存在がAの共感的羞恥に及ぼす影響を検討した。分析の結果、被影響性と想像性が共感的羞恥に影響を及ぼしていた。また、Cが存在している場合、および、AとBの心理的距離が近いほど共感的羞恥得点が高かった。

本研究では、多次元共感性を構成する因子が独立していると想定したため、共感的羞恥に影響を及ぼす因子が仮説と異なる結果となった。今後は因子同士の影響を検討する必要があると考えられた。